

【パネルディスカッション】『次世代につなげる創造的復興の実現』

パネリスト：井上 恭介 氏 (NHK報道局・報道番組センター チーフ・プロデューサー)
岡 浩也 氏 (十津川村 B' Style 代表)
角谷 甚四郎 氏 (天川村 洞川区長、洞川財産区議長)
山本 静夫 氏 (下北山村 生活支援隊 サポートきなり 隊長)
横堀 美穂 氏 (川上村 地域おこし協力隊)

コーディネーター：辻本 浩司 (奈良県南部東部振興監)

○コーディネーター (辻本)

それでは皆さん、改めまして、こんにちは。

今から、パネルディスカッションのほうに入りたいと思います。

本日のパネルディスカッションのテーマは、「次世代につなげる創造的復興の実現」というちょっとかたいテーマですが、言いかえますと、これから大水害の被災地の復興を含めて、南部東部地域をどうやって振興していこうかということを考えたいと思います。水害からの復旧につきましては、かなり進んできております。ただ復旧は進んでも、さきに公表されました消滅可能性都市の数字があらわしますように、本県の南部東部の地域のほとんどの市町村は、このまま何もしなければ、数十年後には消滅してしまう、そういう可能性が高いとされています。県では、この地域が存続していくために、観光をはじめとした交流、あるいは人が移り住み、住み続けられる定住、そういう対策に、今後力を入れていかなければならないと思っております。今後、南部東部地域を魅力的な地域にするための可能性を見つける、そのヒントをいただくために、本日は各地域で活動されております4名のパネリストの方々、それから先ほど基調講演いただきました井上さんのお話を聞き、また議論をしていただき、今後の地域を考えるヒントにできればと思います。

ディスカッションの進め方でございますが、まず1回目は、4人の方々に自己紹介を兼ねまして、活動の内容を5分程度でお話しいただきたいと思っております。井上さんには、その4人の方々のお話を聞いて、またコメントをいただければと。それから、2巡目は、4人の方々に、今後取り組んでみたいことを、四、五分程度でお願いしたいと思っております。最後にまた井上さんのほうからコメントをいただければと思います。

それではまず、天川村の洞川区長さんで、洞川温泉で300年以上続く旅館角甚を営んでおられる角谷さんでございます。どうぞよろしく願いいたします。

○パネリスト（角谷氏）

皆さん、どうもこんにちは。

まず皆さんご存じのとおり、洞川というところは、1,300年前から大峯山を中心にやってきたところでございます。その中で、いろんな取り組みとしては、行者さんオンリーだった地域なので、ほかに地元で何かやろうというときには、行者祭りとかお寺の行事、そういうふうなものを中心に、大体ものを進めていったわけでございます。近年におきましては、だんだんだんだん行者講の減少等になってまいりまして、こちらのほうとしてもいろいろ試行錯誤をしながら頑張っているわけでございますけれども、その中で、洞川財産区というのがございまして、洞川財産区というのは、1,300年も前から、洞川地区入会という意味合いを込めて、財産区の前身、もっと昔は入会権で洞川のいろんな権利を、公的でもなく私的でもなく共同的にやってきたと。これを利用してきているのが、今現在でございます。これは泥辻茶屋といまして、これは昔の茶屋の一角でございます。



これは山の木出し、当時は山の産業が盛んで、財産区もこれで潤っておりました。

そして、それからだんだんスキー場開発をしようということで、ここで初めて観光的な部分にも取り組んでいったということでございます。

今現在は、小さいリフトですが、スキー場も行っております。



そして、施設としては、キャンプ場、そして川を見ると、めちゃくちゃ水がきれいで。県に指定されておりますマスがたくさん泳いでおります。そういうマスを利用して、川魚センターという、こういうものも財産区で行っております。



そして、近年では、名水百選ごろごろ水、これを何とか生かそうやないかということで、水の水くみ場をつくりました。そして、近年では、その水が大はやりにはやりまし

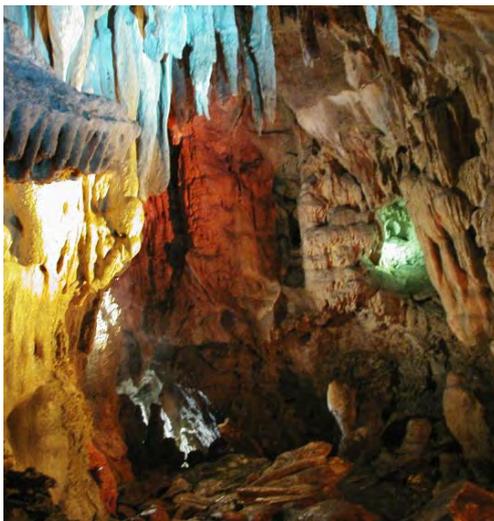


て、思わぬところで水ブームにも恵まれて、地元では、名水を利用した豆腐とかコーヒ、お酒、ゴマ豆腐等々、もちろんごろごろ水の製品、こういうふうなものが多々販売されております。



そして、近くに五代松鍾乳洞というのがございます、ここにも小さなトロッコをつけまして、上りやすく今やっております。

これはちょっと余談でございますけれども、興福寺の華原磬という国宝の石の台座に洞川の石が使われております。



そして、この面不動なんですが、事業の一つとして最近やりましたが、これは昭和の初めに面不動鍾乳洞ということで開発されました。

そして、モノレールを当初つけたわけですが、小さな先ほどの4人乗りの機械式のモノレールでございましたが、これではなくて、もう少し輸送能力の高いものにして、丸太をモチーフにしたこういうものはどうかという計画を立てておまして、現在では、それを模した丸太に近い感じのトロッコモノレールをつくりまして、輸送手段、そして面不動の拡充を行って、観光部分にも力を入れております。





これを見ていただくと、これは洞川の昭和8年の面不動から見た景色でございます。道幅が見えないほど混んでおりました。

そして、今現在は、モノレールから、こういうふうな景色とか雪の景色とか、祭りの花火が見える景色とか、こういうふうに町並みも復興されてまいりました。



おかげをもちまして、近所では、陀羅尼助しかなかった洞川の店屋さんなどでございますが、いろいろ食堂もはやりましたし、そして先ほどご挨拶、いろいろしてもらいましたジャムの話出ましたけれども、洞川でもこういう蜂蜜、地元の蜂蜜をつくったりとか、そしてTシャツ、そしてこれはコンフィチュールといって、これはジャムです。こういうものとかもだんだんふえてきて、食堂も一般向けにふえております。



そういう意味で、洞川は財産区の施設を、今見えるものを中心に、灯台もと暗しではないのですが、行者さんだけじゃなく、行者さん以外のお客さんを引き込むために、今ある、昔からある資源をもう一度見直していろいろ取り組んでいっております。先ほど、知事さんのほうから、洞川はというお褒めの言葉をいただいたんですが、まだそこまでまだまだ行ってないと思っております。もっと頑張っていきたいと思っておりますので、ちょっと長くなりましたけれども、かいつまんで紹介をさせていただきました。ありがとうございます。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございます。

続きまして、下北山村で生活支援隊として活動しておられます山本さんのほうからお願いいたします。

○パネリスト（山本氏）

下北山村生活支援隊のサポートきなり、これ任意団体なんですけれども、活動しております山本でございます。

早速、本題に入らせていただきます。

村の現状でございますけれども、今、住民登録では1,035人、20年前は1,477人おりましたけれども、30%以上減っております。高齢化率が45.3%ということで、非常にお年寄りがふえて、また子供が少ないという過疎地の典型のような村でございます。こうなるとまいますと、いろいろ課題が出るわけなんですけれども、まず集落の維持及び住民生活の維持が非常に困難になりつつあるということでございます。その第1が、住居周辺、山の中でございますので、夏になれば、草が生い茂ってまいりますし、そういったことで、草刈り等にもお年をとりますと、なかなか自分の手でできないといったようなことがございますし、またこれは村全体ではなくて、私の住んでおります池峰という集落の中なんですけれども、家が八十数戸ありまして、そのうち20軒が空き家でございます。4分の1近くが空き家になっております。そういうふうなことになってまいますと、空き家の周辺の宅地でありますとか、あるいは田であるとか畑、こういうところも夏は雑草が生い茂る。草刈りが大変忙しくなるわけでございます。しかし、お年寄りが多いために、これらを十分に自分たちで手を入れるわけにいかないということがございますし、また同様に、田畑もだんだん耕作面積が減ってまいりまして、休耕田畑がふえつつあります。そこへもってきて、人家の近くまで猿やイノシシや鹿、あるいは空からはカラスといったようなことで獣害があつて、一層耕作意欲が落ちてしまうといったようなこともございます。

また、そのほかにも、診療所が村にありますし、商店もありますけれども、専門病院への通院、あるいは日用品、食料品の購入、ちょっとしたものを買いたいということになりますと、一番近いスーパーになりますと、三重県の熊野市でございますけれども、自分たちで車を運転していくということができないと、こういったことも出てきておりますし、

何よりも、仕事をする場が少ないもんですから、当然、若い人が住みつくといったようなことも難しいわけでございまして、子供や若者の減少による地域活力が全体的に低下しておるということが一番の問題になっております。ある集落では、要するに、冠婚葬祭等の日常生活が自分たちの手で全部営めなくなったら限界集落なんだといったようなことを書いた本がございましたけれども、お葬式等を三重県熊野市でやられるという方も出てきております。

これらを解決というと、ちょっと余り大げさなんですけれども、困り事を応援しようということで、集落内の草刈り、あるいは除草、植木の剪定、こういったものをサポートきなりで作業隊員を募集いたしまして、現在8人おりますけれども、そういった方をお願いいたしまして、希望があれば、お年寄りの皆様の家の周りであるとか、畑の周り等の草刈り、あるいは植木剪定をしております。これらは、このサポートきなりは、去年7月に発足いたしましたけれども、去年が16件、ことしは28件の依頼が来ております。それから、スズメバチの退治、特産物の生産加工、地元野菜等の販売、こういうことも、土曜朝市を開催しております、始めております。最初は、去年の7月に始めたんですが、売り上げが2万8,300円だったんですが、現在7万5,000円ぐらいまで伸びております。それから、畑の耕うんの代行、獣害対策ネットの施工、こういったものを主に取り組んでおります。ありがとうございます。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございます。

続きまして、十津川村から来ていただきました家具工房B'Styleで家具づくりをされております岡さんからお願いします。

○パネリスト（岡氏）

どうも岡です。よろしくお願いします。

B'Styleという工場をやっているんですが、僕はUターンで帰ってきたので、今の僕のテーマは、村に暮らすということで、きょうはお話しさせていただきます。



もともと僕は、十津川に生まれて、地元高校を出まして、その後、九州に家具の修行に出ました。その後に、奈良に戻って、つくれるだけでは絶対独立ができないということで、ネット販売とかギターデザインとか、デザインしてつくって売れるという、3つの軸をつくって、僕は設立をしました。そして、いろいろな後、十津川村にUターンしました。

Uターンした理由をよく聞かれるんですが、もともと十津川村は光ネットの整備がとにかく早くできてたんです。それと、今は物流がかなり早くなってます。この2つで、僕はUターンしても、これはネット販売であれば、十津川からどんどん商品を外に出していけるんじゃないかということで帰ってきて、今まで外材をいっぱい使ってたんですが、全て外材をやめて、十津川村の木だけで、僕は今つくっています。

そして、十津川村のほうでプロジェクトをやっているのですが、そこにもお手伝いをさせていただいて、デザイナーの岩倉榮利さんにご指導いただきながら、今家具製作を十津川村でやっています。



いろいろなレパトリーもかなりできまして、おもしろいものがかなりできているような状況です。そして、地元ホテルの展示であったり、観光客に見てもらおうとか、地元の人たちに見てもらおうということでやったり、古民家再生で、十津川村の施設ができましたので、そっこのほうで展示させていただいております。そして、今企業さんとかでも、応接室とか、普通の一般家庭でも受注をもらっています。



地元ホテル展示



そして、この十津川家具のプロジェクトの狙いなんですけど、これはただの産業ということではなくて、村の96%を占める山の木を使って、ずっとこうやってぐるぐるぐるぐる、僕たちは一番最後に製品をつくるんですが、ここで出た利益を山に返そうということ



ことで僕たちは動いています。山に戻して、山が大きくなって、もう一回林業が栄えて、僕たちまで全部が大きくなってきて、その後に、働く場所が少しでもできてくるんじゃないか。そうすると、人は戻ってくるんじゃないだろうかというところでプロジェクトをやっています。

そして、今、そのプロジェクトに当たって、その目標に向かうためにやるべきことがあると思うんですが、それは人材育成だと思っています。僕たちがある能力を、これからみんなにつくること、デザインすることを教えて、最終的には売るんだと、これを教えていって、このプロジェクトを成功させたいと思っています。

そして、最後になりますが、復興ということなんですけど、僕が思う復興は、今だけのものということだけではなくて、未来につなげる大きな地域の復興の復興で、これで最終的に復興しようというところで今やっています。簡単になりましたが、ありがとうございました。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

それでは、4人目ですけれども、本日唯一の女性のパネリストです。また、唯一Iターンということで、県外から来られております。川上村の地域おこし協力隊の横堀さんです。よろしくお願いします。

○パネリスト（横堀氏）

初めまして。川上村地域おこし協力隊、略称かわかもんと呼ばれていますが、その一人、横堀美穂と申します。よろしくお願いします。

まず、私が住んでいる川上村についてなんですけど、先ほど、井上さんのお話で、村の

個性という話があったんですが、やっぱり活動を語る上で、横堀目線での川上村の紹介をちょっとしたいと思って、紹介させていただきます。

1つ目、水源地の村ということで、2つ、川上村に来て格好いいなと思ったことがあります。川上村は、吉野川と紀ノ川の源流域に位置しています。740ヘクタールの原生林を村が買い取って水源地を守っている、これすごい格好いいなと思っていることのひとつです。もう一つが、上流域で、下流域に対して助けてではなくて、ともに一緒に頑張っていこうよというスタンスで取り組んでいるところ、この2つ、水源地の村としてすごく格好いい取り組みをしているなと思っています。

次なんですけど、2つのダムが村にあります。大迫ダムといって、かんがい用水のダムと、大滝ダム、25年に完成したんですけども、洪水調節のダムの2つがあって、水源地でダムがあるということなんですけども、ダムを受け入れて、その上でともに生きていこうというような前向きな姿勢の村だなと思います。

3つ目、吉野林業の聖地なんですけども、吉野杉が川上村で生産されているんですけども、すごいきれいな山で、人工林、後で写真を見ていただくんですけども、ほかの地域の山をされている方が見ても、すごいきれいだねと言っただけ、すてきな資源を持っている村です。

もう一つが、ちょっと漠然としているんですけども、山に暮らす営みが続く村ということで、村を歩いていると、ごろごろといろんな達人に出会います。マムシを見ると目を輝かせて捕まえたりする人や、オノとマッチがあれば、山で2カ月暮らせるというようなおっちゃんに、その日その日で出会ったりします。

その次、元気な村長がいる村。その次です。人を応援してくれる村。これは私が協力隊だからというのものあるんですけども、村でこういうことをしたいなとか、村でこういうことをみんなでやっていけたらいいのになという声に対して、すごいじゃあ協力してあげるよというような、協力隊の協力者という方がすごいたくさんいて、本当にありがたいなと日々思っております。

といったような、私が大好きな川上村の紹介でした。

樽丸といって、たるの原料をつくっているところもあります。

紅葉も結構、人工林だけではなくて、ちゃんと紅葉が見れる場所もあります。

ここからなんですけども、じゃあ私が、この大好きな村で取り組んでいること、これから取り組みたいことなんですけども、ことしの2月から、月に1回イベントをしていま

す。テーマは川上村にあるもので楽しもうということで、やっぱり笑い声がある場所じゃないと人は集まらないということなので、村内のものやことで、自分がいけるなと思うものを見つけて、村内外かかわらず、みんなで楽しいことを村でしていこうという活動を、月に1回、例えば古瓦が落ちてたので、古瓦でロケットストーブつくっておいしいものを食べたりとか、竹やぶがイノシシに食べられるというので、電柵つくって、みんなでタケノコを守って、翌月食べたりとか、そんなイベントをしています。

もう一つなんですけど、これからにちょっとかかわってきちゃうんですが、宿の立ち上げをしようということで、川上村の私の好きという思いを共有してくれるような場所がやはり欲しくて、丁寧にそれを知ってもらえる手段として宿をやっていきたいというのが今後思っていることです。宿についてちょっと写真を見てもらいます。

これ見取り図です。こんな場所の離れのほうを使っていこうかなと思っています。



これが離れの図で、すごいすてきな場所です。



こんなふうに人がみんな集まっていけばいいかなと思っております。

以上、ご清聴ありがとうございました。おもしろいと思った方とか、ちょっと何か行ってみようかなと思った方いらっしゃったら、ぜひ連絡をいただけたら、私お迎えに上がりますのでよろしく願いいたします。

以上です。



○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

4人の方々にお話しいただきました。井上さんに一度コメントいただきたいと思いません。

○パネリスト（井上氏）

いや、素晴らしいですね。きょうのお話そのまま映像をくっつけたら、「里山資本主義 in 奈良」という番組ができるなと思って、今聞いておりました。岡さんのプレゼンなどは今のコメントの上に取材した映像を張りつけたら、そのままりポートになるなと思って伺っていました。簡単に言うと、1つはポテンシャルがすごくありますね。高いですね。

実は小学校のとき、林間学校で洞川に1泊させてもらって、多分角谷さんのところに泊めていただいたと思います。僕も京都府長岡京市という水はきれいなところから来ているんですけど、それでも驚くあの水のポテンシャル。それから行者さんというのは、今の時代はものすごいポテンシャルなんですよね。

そして、山本さんのように、人のつながりを大切にすることを活動にされている。これはすごく大事なことで、要は都会になくて田舎にあるものの典型ですね。

岡さんの、山の木を使って山に返すという取組。そこにちょっとエネルギーも入れていただくと、さらに収益アップしますが。

横堀さんは外の目から見ていいなと思うことに素直に反応されていて、宿の写真が素晴らしいですね。そのまま東京の雑誌に張れますよね。撮り方も含めてわかっている人が撮

ってるんですよ。

あとは何かというと、そういうものが、この何キロかの範囲に全部あるということ、どうやって皆さん自身もつながりをつくったり、つながったものとして発信するか。さらに言うと、奈良まで来る人が、明日香まで来る人がこれだけたくさんいるので、そこから先に全員行かなくてもいいんです。外国人も含めて、そういうことが好きな心ある人が行けばいい。もう少し南のほうまで足を延ばせるように。年に数組でも数十組でも生まれてきたら、この地域は確実にこの数年でもものすごく変わると思います。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

それでは、2巡目は、4人の方々に今後取り組んでみたいこと、特に、ご自分のこともありますでしょうけれども、住んでおられる地域をどうしたいか、地域の思い描く未来の姿というか、そういった地域への思いも含めてお話しただければと思います。まず角谷さんのほうからお願いいたします。

○パネリスト（角谷氏）

これから取り組みたい事業ということで、事業というよりも、天川村なんですけれども、先ほど言いました洞川財産区という意味合いから考えまして、まずはその財産区、先ほど言いましたように、自然資源の共同管理というところの観点から、1,300年続いているわけなんですけれども、そういう意味で、先ほど講演のほうの話にもありましたように、財産区は材木がありますので、木材を使ったまきボイラーとかそういうので、洞川の温泉があるんですけども、31.5度ぐらいなので、それを湯本というか、源泉地のほうでまきボイラーを使って沸かせたらいいんじゃないかとか、水が豊富にありますので、小水力電力を取り入れた簡単な電気をつけるような形でもいいから、まずそういうことの取り組みもやっていったらどうかとか、そういうふうなのは、行政とともに話をさせていただきながらやっていきたいと、このように思っています。

ただその財産区というのは、ここで行政のお偉いさんがいっぱい来てはるんですけども、私どもの財産区、全国に4,000ぐらいの財産区がありますけども、その中に議会が2,000ぐらいで、私どもは財産区議会なんですけども、要は、自主財源でやっていると、こういうことでございます。大体2億円ぐらいのお金があるんですけども、年間

7, 000万円ぐらいの収支決算をやっているんですけども、その中で、先ほど言いましたモノレールをやろうということで、財政調整基金の中から、自分らの腹の中からお金を借りて、そして成功した部分でそのお金を自分らの手元に戻して行って、要は最終的にプラスに持っていこうと。先ほどのごろごろ水の水取り場も同じような感じでやっております。今のところ、うまく黒字になりまして、あと3年ほどしたらペイできて、そしてプラスになっていくんじゃないでしょうか。これは財産区の中での収支の話です。先ほど、写真で最後のほうにもお店屋さんが出たんですが、今までは、陀羅尼助店、旅館、これは行者さんを主にしてたんですけども、一般のお客さんが秋冬問わず、ふえてまいりました。そういう一般の人を取り入れるという意味合いでも、先ほどの鍾乳洞のトロッコは冬も営業できるようなもの、そしてスキー場はまだちょっと赤字でございますけども、スキー場をもうちょっと拡充させていこうとか、こういうふうな取り組みをしております。今後は、鍾乳洞の電飾、中の充実ということで、今取り組んでいる最中でございます。今後は、そういう意味で、地元の人がこれの影響を受けながら、共同経営のような地域でございますので、地元の人があとは自分らで努力をして、お店をやったり、いろいろそういうところに取り組んでいただいて、活性をしていただくような方向に進めばいいかなというふうな感じで取り組んでおりますので、今後ともひとつよろしくお願ひしたいと思います。

以上でございます。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

それでは、山本さん、お願ひいたします。

○パネリスト（山本氏）

写真のほうの説明を兼ねて、今後の取り組みと課題をご説明したいと思います。

画面は、草刈り、これは蜂の巣退治ですね、こういったことを、今協力隊員が中心となってやっておりますし、また作業隊員もいるんですが、これの増員が必要であろうということで、作業従事者の確保に向かっておりまして、講習会等を開いております。



これは、ハチのトラップづくりです。



これは、ハウスを建てまして、大和野菜に認定をされました下北春まなを、冬だけではなくて、春先から夏に栽培できないかということで、いろいろ試行錯誤をして生産をしております。



これが中の下北春まなの栽培の状況です。きょうは写真に写っております隊員がほかの用事がありまして来ておりません。



そのほかに、休耕田を利用した大豆づくり等にも取り組んでおります。



これはハラペーニョみそづくりです。トウガラシの一種で世界で2番目に辛いかということをお伺いしましたが、これも、これがみそと合いまして、試作品の250パックが完売しております。



これがそのうま辛のハラペーニョみそです。



これが土曜朝市に並ぶ季節物の野菜です。ですから、例えば真冬にキュウリとかといってもないわけなんですけれども、その季節季節の野菜を、地元の農家の方がつくって、つくり過ぎて畑で腐らせたり、親戚に一生懸命送ったり近所に頼んで食べてもらったり、そうしている一方で、ショップに行くと九州産のカボチャや長野産のレタスを買っている人がいると、こういう実態がありましたので、地元産の新鮮な野菜を村民の方に食べていただきたいということがきっかけで始めました。今、大体毎週50人ぐらいは来ますし、記念市なんかを開きますと、150人ぐらいの人が来て買ってくれております。

これが、最初のころの様子です。テントが小さいので済んだんですが、大きなテントで最近やるようになりまして、これは3人の隊員が集まった野菜の前でぱちりとやったところでございます。



これは、下北山村だけではなく、奈良であるとか、大阪であるとか、こういったようなイベントがあったときに、春まなの販売、あるいはハラペーニョみその販売等にも取り組んでおります。俗に言う6次産業というやつですか。そういうことにも取り組んでおります。



これは、有機農業の勉強会、やはり交通不便なところですので、特色を持たせた野菜をつくるのが今後有利になるのではないかということで、こういった勉強会を開きまして、有機農業に取り組むきっかけをつくりたいというふうに思っております。



これは勉強会の一コマで、下市町の泥んこ畑のほうにお邪魔いたしまして、有機肥料をつくっている現場を視察させていただきました。

これは、獣害防除ネット、鹿はある程度、人間の背丈ぐらいの網を張れば防げるんですけども、イノシシも、このごろ猿の出没がふえてまいりまして、空から、上から入って、ちょっと大変困っております。



写真は以上です。今後の取り組みなんですけれども、草刈りであるとかといったような作業の従事者の確保、これは取り組んでいかなければいけないと思います。それと、今3名の、先ほど写真に出ておりました協力隊員がいるんですけれども、この方たちは3年で任期が終わって、はい、さようならということでございますので、この方たちが引き続いて、また3年、下北山村で活動していただけたらとか、あるいは5年に延ばすとか、何かそういう体制がとれないかなというふうに思っております。

それから、雑草等の関係もあるんですけれども、今空き家が大変ふえつつありますので、これの有効活用をしたいということで、現在、調査を始めておりますし、将来的には、建物等の清掃管理も引き受けていきたいということです。それと、目下の最大の課題といたしますのは、お年寄りの移動困難者への対策として、過疎地有償運送に取り組むことにいたしまして、準備を進めております。これは法人でないといけないものですから、NPO法人の設立に向けて準備を進めておりますけれども、村内あるいは村外を問わず、お年寄りを中心とした移動制約者に対して、過疎地有償運送でそれらの手助けをしたいというふうに思って、取り組んでいるところでございます。

以上でございます。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

では、岡さん、お願いします。

○パネリスト（岡氏）

今やっている十津川家具のプロジェクトの家具、かなりおしゃれないいできになってるので、これをもっともっとアピールして、販売していくというところを、とにかく売るところをとにかくやっていかないといけない。いいものをつくっても、どんどんそれが売れなかったら何もならないので。

それと、今十津川高校には、地元の高校には、工芸コースというコースがあるんです。その子たちが卒業した後に、町に出るのではなくてとどまれるような仕事提供ができるようになればいいかなと思います。そして、地元のおばちゃんの家が、全部僕たちがつくった家具で、十津川村みんなこの僕たちがつくった家具でうまってるよと。ニトリの家具なんか一個もないんだよというふうな状態に持っていけたら、さっき井上さんおっしゃったように、自分たちは自分でやると。自分の土地でとれたものを自分たちも食べて、売ってもいいし、自分たちで食べたらいいじゃないかというところが、やっぱり大事だと思いますし、今のところ、十津川家具プロジェクトをやってるんですけど、人数が少なく、人材育成をこれからしっかりして、いろんな人が一致団結して、本当に人数が少人数でやってまして、それをこれから拡大して行って、大きな利益を持って、山に返していきたいなというところなんです。さっきすごい言っちゃって、走ってしまってあれなんですけど、本当にこれから、十津川村の家具に期待してください。僕は頑張ります。よろしくお願ひします。

○コーディネーター（辻本）

人材育成に関して、何か思いなどはありますか。

○パネリスト（岡氏）

さっき言わせてもらったんですけど、人材育成のとこなんですけど、やっぱり作るだけではだめだと思うので、つくれることと、デザインできる、1つのことになっちゃうと、つくることしかできないじゃないですか。つくる重労働はやりたくないという人もおれば、デスクワークがいいという人がいれば、その人はデザインに行けばいいわけだし、そういうふうないろんな用途で使える、営業さんなら営業さんとか、そういう人材育成をこれからしていきたいと思います。

仕組みとかまだここからというところですけど。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。では、横堀さん、お願いします。

○パネリスト（横堀氏）

今後の村がどうあったらいいなというのと、自分がどうしていききたいなという話だと思うんですけど、ちょっと大きくまず見てみて、今後、村がどうなったらいいかなというのを考えたときに、同時多発的にいろんなおもしろいことが、いろんな人がやっている村だったら楽しいなと、私は勝手に思ってます。それって、さっき一番最初に川上村についての個性で話したんですけど、人を応援してくれる村なんです。役場の中も、役場じゃない人も、本当に声を出したら出ただけ、すごい、ああじゃあ協力するよという方が本当に多くて、メーンでは確かに役場の方多いんですけども、そういった役場に頼らないで自分たちで同時多発的にやっていかれたら一番いいなと思っています。役場に頼るところは頼る、役場の方も本来の業務ありますし、そうじゃなくて、自分たちでできるところは自分たちでできる、そのパイプ役というか、うまく回す大きな組織があったらすごいんじゃないかなと個人的には思ってます。村でこういうことがしたい、村でこういうことをやれたらいいんじゃないかなという人たち、村内外問わずなんですけど、そういう人たちの背中を押せるような団体というのが、今後できたら本当にいいなと私は思ってます。

自分に何ができるかのところなんですけど、さっき宿という話をしたんですが、定住の窓口になれたらいいってということなんですけど、外から来る人、もちろん中にいる人もなんですけど、川上村の入り口となる受け付けの窓口としての宿という役割でまずいたくて、その役割の中でパイプ役、全部はもちろん私では賄い切れないので、そこで仲間とか一緒にやる人というのがだんだんふえていって、プラスでますます同時多発的にやりたいことがやれる人を呼んだりとか、背中を押したりとか、そういうことが小さな波が大きな波になっていけたら一番いいなと思って、まずはその一歩として、自分のできるところからやっていこうと思っております。

○コーディネーター（辻本）

パイプ役になる団体とか、そういう人がいてくれたらなというのは、あまり人に頼らずにというか、どういうふうな何か思いありますか。こういうパイプ役になるような団体というか、人たちというのは、川上村での可能性というのはどうなんでしょう。

○パネリスト（横堀氏）

応援したい人って、本当にいっぱいいるんです。ただそれに頼っちゃうのがすごい嫌で、そこをうまく橋渡しができるバランスをとれる何かが必要だなっていつも思います。やりたいね、じゃあやろう。じゃあ、役場の人お願いじゃなくて、やりたいね、じゃあやります、でも役場の人ここだけお願いみたいなところに持っていかれたら、本当にいろんな人がいろんなことができるんだと思います。

○コーディネーター（辻本）

頼らず、でも頼ってということですね。

井上さんのほうから、このあたりで総括的なことも含めてコメントをいただきたいと思っています。

○パネリスト（井上氏）

2巡目のお話もすばらしかったですね。

幾つか申し上げたいと思いますが、講演で僕が1時間ほどしゃべったことも含めてなんですけど、幾つか確認をしておきたいと思っています。

1つは、地域で暮らしたり、地域の強み、それから地域の資源をちゃんと自分で生かすということをやろうとするときに大事なことは、1人何役もやるということを努めてやることだと思うんです。20世紀的なというか、逆に言うと、東京的な世界というものは、先ほど申し上げたように、全てのことを分断して分業してやる、それが一番効率的なんだと。もちろんそれぞれの人が24時間やるぐらいの量があれば、それは効率的なんですけれども、でもその効率的なことも含めて、みんな分断されちゃうわけです。老人福祉の問題なんていうのも決定的にそうで、先ほど申し上げた地域の中で、地域の一員としてやることをやっていただきながら、やっていただくことをありがとうと言ってそれを生かしながらつながっていく。お年寄りといえども福祉を受ける対象としてだけではなくて、世の中に対して役に立ったり、野菜を育てたり、それで友達誘って御飯食べて、いろんなことをやるわけなんですけど、都会の中で老人福祉というと、ただそこに予算をかけて、その老人をどうやって介護するかという、1種類のことだけをやろうとするんです。それが分断というものの怖さなんです。それに対して、地方とか地域というのは、とりあえずみんなつながっていたり、顔を知っていたりするということがあって、できるだけエネルギーの

主体としても、使う人としても、つくる人としても、岡さんみたいに、山の木を使っているんなものをつくります、売ります、仲間誘って何かします、さんざんいろんなことやっているんだと思うんです。ついでに言えば、このごろはIT企業なんかで田舎に来て、ITの仕事しながら、農作業もして、自分の食べるものは自分でつくってということをやっている注目されている人もいますよね。そういう意味で、一人何役も何役もやっていくと、元気にもなるし、使うお金は減っていくし、地域の力も上がっていく。これが1つだと思います。

もう一つは、そういうことをして、岡さんのところみたいに家具をつくられたり、先ほど申し上げた周防大島のジャム屋さんのように地域のものを使ってそれを強みにして売れるものをつくっていくと、てきめん地域の雇用が生まれます。あのジャム屋さんでいうと、このごろ、ジャム屋農業部というものがどんどん拡大していっています。何をやっているかという、八十何歳でミカンの木がやれませんが、ハッサクがやれませんが、そこらに人を送り込んで、手助けをして、ハッサクの実がなるところまでやります、それからお芋も育てます。今度の春からは、周防大島は今までジャム用のイチゴは余りやってなかったらしくて、イチゴをやるのに、新しく雇用することにしました。農業学校を出た人を雇用したり、今で20人ぐらい雇用しているんです。1ターンでやってきて、何か始めたいんだけど、差し当たり現金収入ないよというような人がそこで働きながら、新しく何かやれることを探すということをやっています。

岡山県真庭市で、木の発電所という話をしましたが、やっぱりそこでも生まれるものは地域の雇用で、今まで山の間伐材を切ったりすることになかなかお金を払うシステムにはならなかったんだけど、とりあえず間伐材切って発電所に出してくださいというので、100人規模の山の雇用が生まれるだろうと言っています。そこで、発電で生まれたお金は、山の地主に返すということをやっています。岡さんが言っていることと全く同じことをやろうとしています。山にお金が落ち始めると、山の権利を持っている人たちも意識が変わってきます。そうするとしめたものなんです。そういうことをいろいろやられていけるといいかな。

有機農業の話がされていましたが、今こういうことを元気にやっておられる方に共通しているのは、国境の壁を越えて、世界のいろんなところと直接、東京なんか介さずに仲間をふやしたり、知り合いをふやしたりするということをやっておられます。岡山県真庭市がオーストリアとつながっているのも、誰に紹介されたわけでもなく、始終、

オーストリア人と日本人が行ったり来たりしているわけなんですけど。例えば有機農業の世界的なネットワークを結ぶWWOOFという団体がありますが、有機農業って手がかかるじゃないですか。それで、世界中にたくさんいるバックパッカー的に動き回りたい若者に、一宿一飯の恩だといって農作業をさせますというネットワークがあるんですけど、これに参加しているところでは、始終ドイツ人とイギリス人の若い女の子がすたすたやってきて、二、三泊して、きゃあきゃあ言いながら農作業して帰っていくそうで、それだけで山里が明るくなる現象が生まれていたりしまして、そういう人は必ず帰った先で、こんないいところが日本にあったという話をするんです。そういうことも通じて、家具の技術なら家具の技術、いろんな食べ物の技術なら食べ物の技術でも外国とつながれますし、そういうことを同じような思いでヨーロッパやアメリカで、実はいっぱいやっている方がいらっしやるので、そういう方ともつながったりすると、今自分たちがやっていることが実はすごい高いことをやっているのだということが確認できる。自分だけでやっている、「頑張っているんだけどつらいんだよね。」というほうが多いですけど、ちょっと外国人なんかに褒めてもらおうと、「あれ、意外にそうなんだ。」という感じになったりする。そういうことも、ぜひこれからご活用いただければいいんじゃないかなと思っていますし、もう実際されていることの半歩先の延長線上に、全部そういうことがつながって見えているなと思って聞かせていただきました。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

4人の方、それから井上さんからもお話いただきましたが、きょうのお話、皆さんいかがでしたか。南部東部地域の可能性というのを感じていただけたのではないかと思います。

きょうは、代表して4人の方々に来ていただきましたけれども、地域で活動、活躍していただいている方はもっともっとたくさんおられます。こういう方々、また市町村の方々と一緒に県も応援していきたいと思っています。特に思ったのは、皆さんそれぞれの夢というか活動が、この地域の未来につながっていくんだということで、それが都会ではないことなのかなと。それがこういう地域の魅力というか、可能性につながっていくんだなというふうに思っています。

一番問題なのは、人が足りないというところで、怖いのは元気がなくなること、諦めてし

まうと、消滅可能性都市だと言われて、そうなんかなと思ってしまうのが一番怖いことだと思います。ですから、そんなことないよ、こういう元気な人たちが、まだもっともっておられますので、そういう方々と一緒にこの地域を何とかしていきたいというふうに思っております。

最後にもう一言ずつお願いできますか。

○パネリスト（井上氏）

岡さんの家具は、どれぐらいの価格で売ってらっしゃるんですか。今どういう方が買っているんですか。

○パネリスト（岡氏）

僕はネット販売が主になってて、取引先が主なので、かなり安い値段で出します。僕のところは。今はまだ、十津川村はプロトタイプといって、まだつくり始めたばかりのプロトタイプなんで、どうしても人件費とかいろんな加工費がかかるので、これからもっともって値段を、単価を安くして、これから安く提供しようというところです。

○パネリスト（井上氏）

今、横浜の住宅街で暖炉をつけている家がものすごくふえているんです。だから、そのあたりでは、チップの需要が実は急激に高まっていて、近所の造園屋さんが、植木刈り込むと枝がいっぱい出ますよね。あれを30センチにそろえて、1束500円ぐらいで持っていってもらえと言ったら、瞬く間になくなるそうです。実は都市近郊でも、もちろん比較的裕福な方からですけど、そういうところから進んできているので、多分、十津川村の家具もみんな買いたいと言うと思います。

○パネリスト（岡氏）

ありがとうございます。

○コーディネーター（辻本）

そうですね。もっとPRしていきましょう。

角谷さん、どうですか。まきボイラーの話、もう少し聞きたかったんですけども。

○パネリスト（角谷氏）

まきボイラーは、県のほうでもまだそういう事例がないようなので、一回洞川のほうで実験してみてください。1, 000万円ぐらいのを入れてくれたら結構かなと思っております。

ちょっと最後なんですけども、世界遺産10周年ということで、ここに今来ている十津川、天川、下北、川上なんですけども、世界遺産のルートというたら道なんで、それが南北に通ってる道があるわけなんですけども、今現在、その道が南部のほうの道というたら、ほとんど1本、2、3本あるんでしょうけども、ちゃんとした道は1本あるかないかという、それほどアクセスが悪い地域かと私は思っております。ぜひともちょっとリニアモーターカーをなるべく南のほうに引っ張ってきてもらって、道をなるべく東西南北、トンネル抜いてでもいいんで、行きやすくしていただいて、先ほどの家具も売れると思いますので、そういうふうな形を十分とっていただきたいというのが、一つのお願いでございます。あとは地域が頑張りますので、ぜひとも知事さん、よろしく願いいたします。

○コーディネーター（辻本）

山本さん、お願いします。

○パネリスト（山本氏）

困り事解決もたくさん種類がありまして、それなりに取り組んでいるんですけども、どうしても実際仕事をしておられる60歳未満の方はなかなかこういう活動に取り組みにくいとありますし、60歳で会社をやめられて田舎へ帰ってきた人とか、70歳ぐらいまでの方でこういった活動に協力していただける方を募集いろいろかけてるんですが、なかなか集まらないということもありますので、今後、そういうところにも力を入れて、始めましたこのいろんな活動を続けていけるように頑張りたいと思っております。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございます。

最後、横堀さん、お願いします。

○パネリスト（横堀氏）

では、宣伝を。月に1回のイベントを、次は9月21日に、我が家、さつき宿としてやろうとしているのは、実は我が家、今住んでいる場所なんですけれども、そこで写真を撮って展示をしようというイベントを、9月21日やるので、よかったら来てください。9月21日、日曜日です。詳しくは川上村地域おこし協力隊のフェイスブックもしくはブログを見ていただけたらわかると思うんでお願いします。

あと、宿のほうは、今宣言をさせていただきますと、来年の7月にオープンさせたいなと思っています。場所はまだちょっと、本当にどうなるかわからないんですけども、自分の好きな古民家でやっていこうと思っていますので、それも期待していただけたらと思います。

○コーディネーター（辻本）

ありがとうございました。

本日は不慣れな進行ということで、聞き苦しいところもあったかと思いますが、何とか終えることができました。どうもありがとうございました。